
俺と彼の異なる正義

ルカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と彼の異なる正義

【Nコード】

N9657X

【作者名】

ルカ

【あらすじ】

ポケットモンスター、略してポケモン。

彼らのいる世界が、共に過ごせる世界が好きな少年は何を想い、旅立つのか。

ジムリーダー、トレーナー、コーディネーター、ブリーダー。その可能性は木の根のように、無限に伸びている。

少年は、何を指すのか。そして、旅の果てに、何を得るのか。

prologue

この世界には、不思議な生き物がたくさんいる。

犬とか、猫とか……そんなのじゃなくて。

人はその生き物たちと過ごし、育て、一緒に友愛を育み、共に戦いに身を投じる事もある。

この世界は便利だ。

空飛ぶ車がなくても、一瞬で遠くまで移動できるドアがなくても、その生き物たちがいれば、不可能なんて少ない。

絵に描いたような夢物語じゃない。人にとっては、つまらない戯曲に映るかもしれない。

でも、俺は好きだ。

共に笑い、泣き、怒り、憂い。

その名を呼べば、期待に応えてくれるのだから。

「ストライクっ、きりさく！」

ポケットモンスター！。略してポケモン。

彼らのいるこの世界。俺は、この世界が大好きだ。

7 敗目。

ジョウト地方の外れ、険しい山々に囲まれた小さなジムがあった。

そこは、到達すること自体があまりにも難しい為に、設立して5年ほどが経過したと言うのに、2人のチャレンジャーしか受け入れていなかった。

「ストライクっ、でんこうせっか！」

そのジムの近く。湖の近くの草原で威風堂々と仁王立ちする、大きな体躯のリングマ。

リングマの目線の先には、一人の少年と、かまきりポケモンのストライクが、身構えていた。

少年の指示のもと、ストライクが目にも止まらぬ速さでリングマに

詰め寄る。

リングマの目の前に、あっという間に詰め寄ると、リングマが腕で振り払おうとする。

しかし、ストライクの方が速い。すぐに後ろに回り込んで、鋭い力マの一撃を浴びせる。

「続けて、おいうち！」

少しよろけたリングマ。それを確認した少年が、おいうちで追撃を図る。

指示に従い、リングマの背後からおいうちを叩き込むストライク。そのスピードは、目を見張るものがあった。

「グアアアアア！」

おいうちでの追撃をまともに受けたリングマは、ストライクの方へと振り返り、雄叫びを挙げた。

「ヤバイ…ストライクっ、距離を」

キレた。少年がそれを確認して、距離を取らせようとした時。リングマの顔に、ストライクはたじろいだ。

『こわいかお』。すばやさを下げられたストライクは、次の行動に移るのが遅かった。

けたたましい咆哮をあげて、リングマは腕を振り回す。おいうちで、距離が詰まっていただけに、回避は不可能だった。

リングマの『あばれる』攻撃に、吹っ飛ばされたストライクは、地に伏して目を回していた。

「くそっ……戻れ、ストライク！」

少年は、慌ててストライクをボールに戻す。ターゲットを見失ったリングマが、ゆっくりと少年の方へ振り返る。

ヤバイ、逃げないとやられる。

直感でそう判断した少年は、全速力で草原を駆け抜ける。

リングマがそれを追い、腕を振り回しながら少年へと詰め寄ってくる。

木々を薙ぎ倒し、岩を破壊し、まるで土砂崩れのような破壊力を携えたリングマは、あと一歩という所で、少年を取り逃がしてしまっ

「はっ……あのヤロー、まだ勝てねーか。にしても、毎度毎度疲れはててこんらんして……楽しいのかね。」

皮肉混じりに、少年は岩場の陰からリングマの様子を伺う。リングマは、こんらんした事でターゲットを見失い、そのまま自らのナワバリへ帰っていった。

その光景を確認した少年は、大きく息を吐いた。そして、手の中のモンスターボールに視線を落とす。

「まあた、負けちまったなあ……」

モンスターボールの中のストライクは、申し訳なさそうに少年を見上げていた。

少年とリングマの戦闘は、これが初めてのものではなかった。ストライクと出会った日。その時からずっと、戦ってきた。

その戦績は0勝7敗。この山々のポケモンが強いこともあるが、あのリングマはこの界隈のボス。

あれでも、最初に比べればずいぶんと戦えるようになったくらいだった。

「はっはっは、リチアくん。また負けたのか？」

「惨敗！ あいつ強すぎるよ、ユーゴさん。」

少年の名はリチア。トレーナーズスクールを卒業し、ポケモンを手にしてから8日目の12歳の男の子だった。

「でも、キミのお父さんみたいになりたいのなら、もっと頑張らなきゃね。」

リチアに微笑みかける青年は、ユーゴ。リチアの父の弟子、という立場らしい。

彼もポケモントレーナーで、リチアに比べれば圧倒的な実力と、経験の差があるのは言うまでもない。

「さあ、ジムに戻ろうか。今日は久々にチャレンジャーが来るらしいよ。」

「そうなの？ 聞いてないなあ…まあ、いいや。バトルも見たいしね。」

2人は、小さなジムへと向かう。山の麓に建てられた、無骨なジム。

シロガネ山の、シロガネジム。
それが、このジムにつけられた名称だった。

カントーからの挑戦者

「ただいまー。」

ユーゴと共に、ジムに戻ってきたリチア。ジムのドアを開くと、父親と20手前くらいの青年が視界に映った。

父親は、このシロガネジムのジムリーダー。青年は、恐らく例のチヤレンジャーなのだろう。

隣に従えたガルーラから醸し出された雰囲気。それは、あのリングマとは比べ物にならない程の、強者のもの。

ピリピリと、張り付くような緊張感。これが気圧されるという感覚だろうか。

「ん、戻ったか。ちょうど今からジム戦を始めるところだ。ユーゴ、

審判を頼むぞ。」

「ハイツ、わかりました！」

父、スオウと青年がこちらへ気づいた。青年はリチアの顔を確認すると、優しい笑みを浮かべた。

絶対的な強者の風格に似合わない、優男風のチャレンジャー。彼がどのようなバトルをするのか。興味深く感じた。

「ではこれより、ジムリーダースオウと、チャレンジャーナツキのジム戦を行う。使用ポケモンは2体。どちらかのポケモンが全て先頭不能となった時点で」

バトルフィールドに場を移し、向かい合う父とチャレンジャー。チャレンジャーは、マサラタウン出身のナツキというらしい。

ゴツゴツした、シロガネの山中のようなフィールドで、どのようなバトルを展開するのか。

2人のバトルは、静かにその幕を開いた。

「よし…まずは、エビワラー！」

スオウの1匹目は、パンチポケモンのエビワラー。かくとうタイプで、様々なパンチを得意とするポケモンだ。

ナツキはエビワラーを見て、一つ間を置いた。先ほどまで携えていたガルーラでは相性が悪い。なにをくり出すのか。

「リザードン！」

チャレンジャー、ナツキが選択したのはリザードン。ほのお・ひこうタイプで、かくとうタイプのエビワラーには相性が良い。

が、エビワラーのパンチはかくとうだけではない。かみなりパンチがある為、ひこうといえども油断は命取りだ。

スオウは先攻をナツキに譲る。

ナツキは、エビワラーの様子を軽く見て、リザードンをけしかけた。

「リザードン、かわらわりっ！」

大きな翼を最大限に動かして、リザードンは一気にエビワラーに向かって直進。

そのスピードたるや、リチアのストライクのそれよりも圧倒的に速かった。

リザードンは拳を振り上げ、エビワラーへと振り抜く。が、当たらない。

エビワラーの『みぎり』。
リザードンの攻撃は不発に終わっていた。

「エビワラー、かみなりパンチ！」

「くっ…そらをとぶ！」

不発に終わったリザードンに対して、エビワラーが右の拳に電気を纏わせる。

ナツキも危険と判断し、リザードンを上空へと逃がす。しかし、スオウはそれを許さない。

「スカイアッパー！」

『そらをとぶ』で逃げたりザードン。それを狙いすましたように、スオウはスカイアッパーに攻撃を切り替えた。

その判断の速さは、圧巻の一言。トレーナー経験の浅いリチアにも、この戦法が一朝一夕で培ったものではないとわかる。

リザードンはエビワラーの拳をまともに受けて、空中でバランスを崩す。

たまらず、地上に降りた時。

エビワラーが、また次の一手へと動きを始めていた。

「エビワラー、きあいパンチっ！」

「っ……っ！ フレアドライブ！」

トドメの一撃を目論むエビワラー。リザードンも指示を受けて、体勢を立て直して炎を体に纏う。

互いに突っ込み、フレアドライブときあいパンチの正面衝突。
轟音を巻き上げ、2匹はそれぞれ反対方向へ吹っ飛ぶ。

まさに力と力のぶつかり合い。ジム内を包む熱気をまざまざと感じたりチアは、まばたき一つ惜しいと、目を見開いた。

倒れた2匹は立ち上がらない。

互いに目を回して、引き分けという結果に終わっていた。

2人はそれぞれポケモンをボールに戻す。息つく暇さえなかった激しいバトルも、ここでようやく一拍置かれた。

「なかなかやるじゃないか…カントーでも有数のトレーナーとの噂は伊達じゃないな。」

「スオウさんこそ…最強のジムリーダーの名は錆びいていませんね。」

互いに笑みを浮かべた2人。

スオウは、先に次のボールに手をかけた。

次にスオウが選んだのは、ゲンガー。ゴーストタイプのポケモンだ。

ジムというものは、大体が何かのタイプのエキスパートであるが、このジムは数少ないタイプにこだわらないジム。

スオウが特化しているタイプはない。だが、どんなタイプにも対応出来るような実力を見たい。という強い思いが、このジムの設立に繋がったらしい。

「……………ガルーラ！」

ナツキはゲンガーを確認して、少し考え込んでから、ガルーラを選択した。

ガルーラはノーマルタイプ。ゴーストタイプには相性が悪く感じるが、ノーマルにゴーストの技は効かない。

相性としては、どちらかが有利・不利というわけではなさそうだ。

「ガルーラ、メガトンパンチ！」

ナツキの指示を受けたガルーラが、ゲンガーまでの距離を詰めて力一杯拳を振るう。

ゴーストタイプには、ノーマル技は効かない。あれだけのリザードンを育てていたナツキ。こんな選択ミスをするとは思えない。

「っ……！ ゲンガー、かわすんだ！」

突然、スオウが何かに気づいたらしく、ゲンガーに指示を送る。ゲンガーも戸惑いながら、かわそうとするが、間に合わない。

鈍い音が響き、ゲンガーが衝撃に押される。ガルーラの攻撃はクリ

ーンヒットしていた。

「やはり、きもったまか…」

「ガルーラ、続けてメガトンパンチ！」

『きもったま』。リチアもトレーナーズスクールで習ったことのある特性の一つ。

ノーマルやかくとう技が、ゴーストタイプにも当たるという特性。気付くのが遅かった為、ゲンガーはまともに攻撃を受けていた。

ナツキは攻撃の手を緩めない。

ガルーラに指示を送り、ゲンガーを追い詰めていく。

「ゲンガー、きあいだまつ！」

スオウもやらねばなして、黙っていられない。ゲンガーはすぐに立ち上がり、両手にエネルギーを溜めて放出する。

本来は、かなりの大技で、命中させるのは難しい技だが、ガルーラは突っ込んできていたので避けられない。

ゲンガーのきあいだまを、正面から受けたガルーラ。タフなガルーラの為、まだ先頭不能には至っていないが、大きなダメージには違いない。

衝撃に後ずさりして、ガルーラはしっかりとその足で踏ん張る。が、ほとんど体力は残っていないのか、かなり苦しそうだ。

「ゲンガー、休ませるな！ 10まんボルト！」

続けざまにスオウは、ゲンガーに追撃を指示する。10まんボルトは、きあいだまに比べればずっと初速も速い。

「くっらえるー！」

避けるのは無理。そう判断したナツキは、ガルーラに防御を指示。ガルーラはしっかりと体勢を整える。

激しい稲光の中、電撃がガルーラに直撃する。これを耐えられるかどうかで、このバトルも変わるだろう。

電撃が止み、ガルーラはまだ倒れなかった。ナツキの言葉と期待を背負い、根性だけで耐え忍んでみせた。

「ガルーラ、きしかいせい！」

「しまっ…！」

追い詰めた事により、少し隙を見せたスオウ。そこを逃さずに、ナツキは文字通り、起死回生の一撃を仕掛ける。

鬼気迫る攻撃に、ゲンガーも回避する事が出来ない。ガルーラの攻撃を喰らって、吹っ飛んだゲンガーは、そのまま岩に激突。

完全にダウンしてしまった。

「ゲンガー、戦闘不能！ よって、勝者チャレンジャー、ナツキ！」

掲げられたフラッグ。それはナツキに向けて挙げられていた。父は負けてしまったが、その一進一退の攻防は、新米の目にはとても新鮮に映っていた。

ガルーラに駆け寄り、優しく包容するナツキ。先ほどまでの険しい表情はどこへ行ったのか。

穏やかな笑みを浮かべて、戦い終わったガルーラを優しく労った。

「うん、実に良い戦いだった。これを渡しておこう。」

「ありがとうございます。」

バトルが終わった後、スオウはナツキにバッジを渡した。白銀に輝く、『プラチナムバッジ』だった。

「……………」

「どーだった？」

「よく…わからない。」

これがジム戦。想像の遙か上に行くレベルの戦いに、リチアは夢でも見たかのよう。

ユーゴが感想を聞いてきたのに、リチアは曖昧な返事しか返すことが出来なかった。

帰路、決意

「ロケット団がシルフカンパニーを占領した時、ちょうどジム戦やるうと思ひまして、ヤマブキに寄ってたんですけど」

その夜、シロガネジムではスオウ、ユーゴ、リチアにナツキを交えての夕食が行われていた。

バトルの後、せっかくだからという事で、一泊してもらおう事になったからだ。

食事時の会話は、専らナツキの旅の話。ナツキはジョウト、カントーを回って、バッジも今日手に入れたものを含めて17個。

その間の3年間の旅について、ユーゴが問いかけたのがきっかけだった。

旅の経験のないリチアにとって、ナツキの話はどんな冒険ものの小説やドラマより面白かった。

中でも、ロケット団との戦いに3人は夢中になって聞き入った。当時、ニュースにもなったその事件は、スクールでも習った。

近年、世界各国で起こった大きなテロは3つ。それらはすべて、民間人によって解決されたと聞いた。

カントー、ジョウトでのロケット団。ホウエンでの、マグマ団・アクア団。シンオウでのギンガ団。

ナツキが話しているのは、この中のロケット団の事。教科書や、先生の口から知った事件を解決した人間が目の前にいる。

この光景を、スクールで授業を受けている頃のリチアに想像することが出来ただろうか。答えはNOである。

「リチアも、旅に出るのか？」

「え…あ、俺は……」

ナツキに問いかけられ、リチアは口ごもる。旅に出たい。そう思うのは確かだが、不安も大きい。

ナツキが体験した事だって、一歩間違えれば命を落としかねない事であるのは間違いない。

「不安か？」

答えを出せないリチアに、スオウが問いかける。小さく頷くと、父は優しい瞳を向けた。

「誰だって…最初は不安なんだ。旅に出る。と言っている訳じゃない。じっくり、考えるんだ。」

「……………わかった。」

そう言うと、スオウはリチアに寝るように促した。時計を確認すると、確かに子供が起きているような時間ではなかった。

おやすみ。と、3人に告げたりチアは、一人自室へと戻った。

布団に潜り込み、目を瞑ると、今日の2人のバトルが頭に浮かんだ。

自分がリングマと戦う時のような、駆け引きも何もない戦いとは違う。戦略と、パワーに満ちた世界。

旅に出れば、それも養われるのだろうか。闇に落ちる意識の中、リチアの中で、答えはすでに出ていた。

「ストライクっ、きあいだめ！」

翌日、リチアは早朝から日課となりつつあるトレーニングを行っていた。

きょうしよに当たりやすくなったところで、リチアは小石を離れた所へ投げる。

「でんごうせつか!」

続けて、リチアが指示を出すと、ストライクは飛んでいく小石を追いかけて加速する。

素早く移動したストライクは、カマで小石を叩きつける。直径3cmくらいの小石は、静かに亀裂が入り、真っ二つに割れた。

「おお、的確で速い。ついこの間産まれたばかりだって聞いたのに、よく鍛えられているね。」

リチアが声のした方を振り返ると、ナツキがストライクを見て拍手を送っていた。

隣にはキングドラ。昨日は姿を見せなかったポケモンを連れていた。

「おはようございます。」

「うん、おはよう。」

爽やかな笑顔を浮かべ、ナツキはリチアの近くの段差に腰を降ろした。

キングドラは湖へ。雄々しくも、優雅に水辺を渡るその姿に、リチアも目を奪われた。

「で、答えは出たかい？」

「はい。俺…旅に出たい…いや、出ます。出て、色々なものを見てみたいです。」

その言葉を受けたナツキは、そうか。とだけ呟くと、キングドラを手元に呼び寄せた。

「旅に出れば、色々な事がある。時には辛い事もある。そんな時は、一緒に旅する仲間を頼れば良い。君が愛情を込めて接すれば、きっと彼らも答えてくれる。」

キングドラを優しく撫でるナツキ。貴禄たっぷりのキングドラも、気持ち良さそうに顔を緩めてナツキに甘えていた。

その日の昼前。ナツキはリザードンと共にマサラタウンへと帰っていった。

彼が残したものは、チャレンジャーの少ないジムへの活気と、少年の心に残った一言。

少年の心に、それははつきりと焼き付き、離れない。憧れというものは、こういう事なのか。

少年は、幼いながらにそれを感じた。そして、強く心に決めた。自身も旅に出て、彼のようなトレーナーになることを。

「それじゃ、10日間だったけど……ありがとう。また来るよ。」

「元気でね、旅の無事を祈るよ！」

「母さんによろしくな。」

ナツキとの出会いから数日。
リチアは、父とユーゴと共にクチバシティの港へ来ていた。

リチアの実家はイツシュ地方のカノコタウンで、父は単身赴任ではないが、1月ごとにジムと自宅を交互に過ごす。

その為、リチアは今日の昼に船で帰ることに。帰宅後は、母を説得して旅に出る。

まだ見ぬ町、人、ポケモン。

これから待ち受ける様々な出会いを夢見て、心を弾ませて船に乗り込んだ。

ほどなくして、汽笛をあげて船は港を出た。甲板から見える父と、ユーゴの影が、徐々に小さくなっていく。

ベルトにつけたモンスターボールに手をかけた。中を覗き込むと、ストライクも意気込んでいるのがわかる。

「よし、頑張ろう!」

少年が主人公の冒険の物語は、その瞬間に開幕した。太陽は、それを見守るように、暖かく世界を照らしていた。

旅立ち、贈り物

「え？ 別にいいわよ。気を付けて行ってらっしゃいな。」

母のこの一言で、少年の旅は始まった。

「軽っ！」

「いいのよ、男の子なんだから、活発にいかなくっちゃ……はい、ランニングシューズ。」

父から話でも聞いていたのだろうか。即決で了承した母は、息子の旅の準備を進めていた。

新しいランニングシューズを箱から出し、ライブキャスターの設定を確認。まるで、自身が旅に出るかのようだ。

「…………俺、荷物まとめてくるね。」

「ハイ。」

大きくため息をついて、リチアは2階の自室へと向かった。

階段を上がって突き当たりの左の部屋。ドアノブを回し、中に入る。

部屋はベッドと机、パソコンに据え置きของเกม機。それから、スクールで使った教科書。

それ以外は特に何もない。目立ったものはなく、年頃にしては、少し片付きすぎているくらいだろうか。

リュックを手に取り、キャンプキットを放り込む。何枚か服や下着を入れて、リュックの半分くらい。

「……………あれ？」

あと、なにか必要なものはないかと辺りを見渡すと、ベッドの上の一つ。モンスターボールが転がっていた。

母のポケモンだろうか。リチアは何となく好奇心にかられて、ボールを手に取った。

中を覗き込むが、見たことないポケモン。母が新たに捕まえたのだろうか。

リチアは、そのボールの開閉スイッチを押した。赤い光が走り、ラッコのようなポケモンが現れた。

「なんだ……………なんてポケモン？」

丸々とした顔には、ヒゲ。お腹には貝。なんとファンキーなポケモンだろうか。

見た目で判断するなら、水タイプ。あまり強そうには見えないが、愛くるしい姿をしている。

「あ、リチアー。アララギ博士が贈り物ってボール置いていったわよー。」

見計らったようなタイミングで、下から聞こえてきた母の声。もう開けたよと、リチアは苦笑するしかなかった。

「じゃあ、博士にお礼言ってくる。」

ポケモンをボールに戻し、ベルトに装着する。ストライクに続いての2匹目のポケモン。

腰に新たに乗った重み。これほど嬉しい重みもなかった。

家を出て、大きく深呼吸を一つ。昼下がりの町並みは、田舎町と言えど活気はある。

ご近所さんに挨拶をしながら、新しいランニングシューズの感触を確かめながら、アララギ博士の研究所へと向かう。

走って約5分。研究所の前で郵便物を見に来ていた助手のお兄さんに挨拶をして、リチアは研究所の中へと入っていった。

田舎町に似合わない、大きな建造物。中に入ると、様々な機材と資料が所狭しと並んでいた。

「こんにちはー。アララギ博士います?」

「やあ、リチアくん。博士なら奥にいるよ。」

資料の整理をしていた助手に挨拶。言われたように、奥へと入っていく。

この研究所は一般解放されており、リチアも子供の頃から幼馴染みと共に、良く訪れたものだ。

その為、中の構造はよく知っている。アララギ博士のいる、研究室のドアをノックして、返事が聞こえてから中に入った。

「こんにちは。」

「あらら、リチアくん。帰ってきたのね。」

中に入ると、すぐに博士は気づいたようで、座っていた椅子から立ち上がって笑顔を向けた。

アララギ博士は、ポケモンの研究者としては珍しい女性。それも、若くしてその地位まで上り詰めた実績も兼ね備えている。

リチアは、博士からの贈り物であるモンスターボールから、ラッコのポケモンを出した。

「ああ、残ってたのはミジュマルだったのね。」

「ミジュマル？ 残ってた？」

アララギの言葉に、リチアが疑問を問いかけると、ラッコのポケモンの名前だと説明した。

また、ボールは本来ならリチアの幼馴染みも含めた3つ用意されていた。それぞれの、スクール卒業記念にだ。

ほのおタイプのポカブ。くさタイプのツタージャ。そして、このみずタイプのミジュマル。

幼馴染み3人で選ばせるつもりだったらしいが、リチアが2人よりも早く、父からストライクのタマゴを手にしたことで、選択権を剥奪されたらしい。

「それに、2人とも…もう旅立つっちゃったわね。」

「……………はい？」

「トレーナーとしてのアドバンテージは、リチアにあるから僕らは先に行きます。だって。」

アララギから話を聞くだけで、何となくその光景が頭に浮かんできた。確かに、幼馴染みの片方は言いそうだ。

「俺もすぐ出て、2人に追い付きます。」

「あ、待って……旅に出る時に、お願いがあるの。」

帰ろうとするリチアを呼び止め、アララギは懐から、赤い機械を取り出す。

リチアはそれを受け取り、言われるがままにスイッチを押した。すると、機械は動きだして画面を映す。

『ミジュマル お腹のホタチで戦う。攻撃を受け止めてから、すかさず切りつけて反撃するのだ。』

画面に映し出されたのはミジュマルのデータ。そして、特徴が音声で再生されていた。

「これ……！」

「それはポケモン図鑑。2人にも渡したんだけど……ようは、出会ったポケモンをそれに記録してほしいの。」

話を聞いてみると、このポケモン図鑑は、ポケモンの近くで起動さ

せると自動で、そのポケモンのデータが記録される。

現在、確認されている抱けでも、ポケモンの種類は600を越える。また新たな発見と、色違いや模様違い等も記録する事で、研究に協力してほしい。との事だった。

リチアは話を聞くと、少しだけ図鑑をいじってみた。すると、別の画面が映し出された。

使える技という表記の下に、『たいあたり』『しっぽをふる』という、2つの技が表示されている。

ただデータを記録するだけでなく、そのポケモンの事を詳しく教えてくれる。これは、トレーナーにとってかなり有益なもの。

「わかりました、研究に協力します。」

「ホントに？　じゃあお願いするわね。」

幼馴染みの2人も持っているようだし、何より便利で、断る理由がない。

リチアは図鑑を上着の内ポケットにしまって、アララギ博士の研究所を後にした。

まさか父の所に行っている間に、選択権を剥奪され、2人に先に旅立たれるなんて思いもしなかった。

リチアはすぐに家に戻ると、出る前に用意の終わっていたリュックを背負う。

結構な量の荷物の為か、苦になるほどではないが、リュックはなかなか重い。

「じゃあ、行ってらっしゃい。お土産よろしくねー。」

「旅行に行くんじゃないんだから……まあ、いいや。行ってきます。」

母に手を振り、自宅を後にする。これから始まるのは旅。1歩ずつ、その感触を踏みしめながら、1番道路へ向かっていく。

速く2人に追い付く。ナツキのように強くなる。広い世界を見てみたい。

純粹な想いを乗せて、1番道路に入った。スクールのバトルの実習で来た以来。だが、その頃とは違う景色に見える。

「お、ヨーテリーだ……よし、ミジュマルっ！」

野生のポケモンに出会い、自らのポケモンをボールから出す。教育では味わえなかった感覚が、リチアの頭に渦巻いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9657x/>

俺と彼の異なる正義

2011年10月28日15時13分発行